

市史だより

がちまやあ Gači-majaa

第25号・2012年2月29日(水)発行

年3回 (5・9・1月発行予定)

編集・宜野湾市教育委員会文化課 市史編集係
〒901-2203 宜野湾市野嵩1-1-2

問い合わせ・情報提供先



(098) 893-4430

Fax (098) 893-4434

E-Mail: kyoiku08@city.ginowan.okinawa.jp

※宜野湾市役所のホームページで、バックナンバーも公開中!!!

HP: <http://www.city.ginowan.okinawa.jp>

普天間は、宜野湾市の北東端にあ
って、宜野湾方面と西海岸方面、沖
縄市方面の各街道が結ばれる場所で、
交通の要所です。これは戦前も同様でした。

戦前の普天間は、中頭郡役所、中頭教育部会、
農事試験場など多くの公共官庁が置かれ、また、
普天満宮・普天満山神宮寺の所在地と知られ、各
地から参詣人が集まってきました。その宮前には
商店が立ち並び、医院・旅館・風呂屋・飲食店・
理髪店・写真屋・時計店などがあり、客馬車も行
き交い、並松街道沿いに普野城製糖工場もあり、
中頭地域の中心地として栄えていました。

普天間で華やかな行事であったのが、5年周期
で開催される村遊びで、普天満宮の境内で5日間
にわたって行われたそうです。また、獅子舞も毎
年、旧暦7月13日に獅子屋で、15日には普天満
宮で奉納舞が行われていました。

戦後の普天間は、普天満宮・神宮寺一帯が残さ
れるも、集落を米軍基地に接收され、人々は、軍
道5号線(現国道330号)沿いに住みました。そ
の後、転入者が増え続け、普天間二区が新設され、
国道330号西側(現普天間三区)が開放され、外
人相手のレストランなどが立ちならびました。

現在、かつて程の賑わいは影を潜めましたが、
街づくりの気運が高まっており、今年2月には市
民劇「あらたか」が催され、人気を博しました。

普天間を知ろう



現在の普天満宮



普天間の獅子舞



市民劇「あらたか」

シムガー（下の泉）

普天間の拝所となっている泉です。現在はキャンプ瑞慶覧の中となっています。

泉シムガー（下の泉）

普天間グスクニール遺跡 4p

普天間下原第二遺跡 4p

フィールーザン

普天間フィールー丘陵古墓群 4p

ソンヤマ（村山）

戦前の宜野湾村の村有地です。病気で死んだ家畜を埋める場所でした。現在はキャンプ瑞慶覧の中となっています。

ソンヤマ（村山）

戦前の拝所

普天満

普天満山神宮寺

普天満宮 5p

中頭小学校 (1881年) 5p

普天間古集落遺跡 4p

キャンプ瑞慶覧

サンエー

サンフティーマ

普天間国民学校

(1922年まで普天間尋常小学校
1940年まで普天間尋常高等小学校) 6, 7p

メーシジ

現在の行政区界



普天間の位置

==== 宜野湾並松

普天間古集落 遺跡の名称

----- 遺跡の概略の範囲

メーシジ（前筋）

普天間の南側にあった小高い松林です。戦時中、日本軍が陣地壕を掘っていました。現在、丘は削られ住宅地となっています。

野嵩ゲート

普天間飛行場

宜野湾並松

ぎのわんムラ紀行 ～普天間編～

スクナグ

普天間橋



爆破された普天間橋

普天間橋

普天間川に架かっていた石橋です。戦時中、日本軍が爆破しました。現在の石平人道橋のあたりにありました。

宮洞穴遺跡 4, 7p

前 5, 7p

郵便局 6p

普天間高等学校

農事試験場普天間試験地
(1902年まで中頭高等学校)

6p

中頭教育会館 6, 7p

中頭地方事務所
(1942年まで中頭郡役所)

6, 7p

中頭土木事務所 6p

イダシナミチ



イーヌカーの水タンク



龍頭の像

イーヌカー（上の泉）

普天間の拝所となっている泉です。旧暦3月には、イーヌカーと、普天間の北側にあるシムガーを隔年で拝んでいました。道路工事で水脈が切れ、現在は別の場所から水が湧き出し、そこには龍頭の像がとりつけられています。

泉 イーヌカー（上の泉）

普野城製糖工場

「ぎのわんムラ紀行」の第3回目は、普天間です。普天間は交通の要所で、官公庁や学校、普天満宮などが立地していました。人の集まる普天間には、やがて商店・飲食店・旅館・理髪店・風呂屋などが建ち並び、中頭郡でも有数の“マチ”でした。また、獅子舞や綱引きなどの伝統行事も行われていました。そのような普天間も、沖縄戦のあと、集落の大部分をキャンプ瑞慶覧に接収されてしまいました。

今回の「ぎのわんムラ紀行」では、普天間の自然や祈りの場、遺跡・史跡などのいくつかを紹介します。

普天間の遺跡

普天間には、市名勝の普天満宮洞穴や市無形民俗文化財の獅子舞があります。これらを育んだ普天間は、現在キャンプ瑞慶覧に大半の土地を接収されています。それには、集落も含まれており、現在の普天間区は、戦前はマチや主に耕作地であった場所でした。普天間には遺跡が25カ所あり、キャンプ瑞慶覧内に集中しています。

普天満宮洞穴遺跡

普天満宮の拝殿後ろに開口する洞穴で、その中から、宇佐浜式といわれる土器（約3000年前）や貝の装飾品や人の下顎骨、その上の林からは、石斧やグスク時代（約700年前）の土器、また、周辺には灰色瓦や古銭も見つかっています。これにより、洞穴は、少なくとも約3000年前から、人々に利用されていたことがわかります。



↑ 普天満宮洞穴遺跡
普天満宮洞穴 全長約280mあり、普天満宮からキャンプ瑞慶覧内に延びています。

普天間グスクニー遺跡

キャンプ瑞慶覧内の普天間川沿いの標高45mの石灰岩台地に広がる遺跡です。この遺跡からは、最近の調査で、仲原式とよばれる土器が完全に近い形で、壺や深鉢など、数10点が埋められた遺構が見つかっています。

普天間下原第二遺跡

キャンプ瑞慶覧内の普天間川沿いの標高55mの石灰岩丘陵にある遺跡で、約3000年前の「溝状落ち込み遺構」が見つかり、その遺構内から宇佐浜式土器が見つかっています。しかし、貝や動物の骨などの食べかすが見つからないことや、遺構を境に柱穴などの有無があることから、祭祀場や集落を区画する溝などが考えられています。沖縄や奄美では、その発見例がないので、注目されている遺跡です。



↑ 普天間下原第二遺跡
溝状落ち込み遺構(中央のカーブする溝：白い点線) 左側に柱穴があり、右側には何も見られません。

普天間古集落遺跡

キャンプ瑞慶覧内の普天満宮・神宮寺の西側に広がる遺跡で、戦前の普天間の方々の生活の場でした。普天間には発祥の伝承があり、前普天間（普天間小学校付近）と後普天間（神宮寺西隣付近）に集落があったものが、前普天間が後普天間に移動したとされています。この遺跡からは、碁盤目型の村跡が見つかり、屋敷内の家屋配置が分かり、村内をめぐる道や大正期の県道跡、更に、戦時中に埋められた陶磁器も見つかっています。



↑ 普天間古集落遺跡
大正期の県道跡 伊佐・普天間の間の県道です。奥の木々の場所が、普天満宮と神宮寺で、普天間集落は写真の県道左側にありました。

普天間フィールー丘陵古墓群

普天間古集落を北から北東を取り巻く丘陵にある古墓群で、普天間の根屋である屋号東江と志礼の墓もその中にあり、ほかに古式の掘り込み様式の墓も多数あります。



普天間のシンボルあれこれ



宜野湾並松は、宜野湾村のシンボルとして広く知られていました。村内の中央を南北に貫くこの道は、琉球王府時代の幹線道路でした。嘉数・真栄原・佐真下・宜野湾・神山・愛知・赤道・中原・上原・新城・野嵩・普天間などの集落を通り、道の両側にはリュウキュウマツが植えられていました。美しい松並木で、普天間の普天満宮へ詣でる道としても利用されていました。



▲ 宜野湾並松と一の鳥居
1924 (大正 13) 年頃



普天間参詣は、1644 年、尚賢王の時代に始まったとされます。毎年旧暦 9 月に琉球国王が普天満宮に参詣し、無病息災を祈願しました。国王だけではなく、御殿 (王子家・按司家) や殿内 (親方家) も参詣していたそうです。さらに、18 世紀の初め頃には一般の人たちにも広く行われていました。九月参りといい、普天間以外では普天間参りともいいます。家族の健康祈願をしました。



▲ 普天間参詣のジオラマ
宜野湾市立博物館 所蔵

普天満宮は、琉球八社の一つです。ここにまつわる話として、①首里桃原の美女が麻の糸を引きながら普天間の洞穴に入って神になったという話。②機織りをしている娘が難破した父と兄弟を夢の中で救う話。③薩摩の武士が普天間の洞穴に忘れた刀は、他人が見ると蛇になったという話などが伝わっています。



- 尚賢 (しょうけん)
1625~1647 年。第二尚氏王統 9 代の王です。在位はわずか 7 年でした。
- 尚泰久 (しょうたいきゅう)
1415~1460 年。第一尚氏王統 6 代の王です。諸国と貿易を盛んに行いました。



普天満山神宮寺は、普天満宮隣にあります。寺の縁起によると、尚泰久王の勅願により開山されたといわれているそうです。また、中城城主護佐丸が、勝連城主阿麻和利に攻められて落城したため、その城の資材で護佐丸の菩提を弔うために建てられたともいわれているそうです。寺も地元との結びつきが強く、例祭 (観音祭) には普天間の青年たちが奉納踊をしたり、八月十五夜には獅子舞が奉納されました。



▲ 普天満宮例大祭
1953 (昭和 28) 年



宮前・寺の前とは、普天満宮と普天満山神宮寺がある一帯のことです。信仰の中心地であると同時に、交通の要所でもありました。多くのマチヤ (商店) が立ち並び、大変賑わっていました。また、普天満宮・普天満山神宮寺は子どもたちの遊び場所でもありました。また、朝は掃除をしてから登校していたそうです。



▲ 普天満宮と普天満山神宮寺
1956 (昭和 31) 年





教育・行政でも中心的なまち 普天間



宜野湾間切として初めて小学校が置かれたのは普天間でした。正確にいうと、1881（明治14）年に普天満山神宮寺を借りて中頭小学校が開校されました。教員として開校準備に携わったのは、佐賀県出身の野村成泰のむらなりやすという人でした。開校当時は、生徒との言葉の違いや、文具なども揃わない環境のため大変だったようですが、第2代沖縄県令上杉茂憲一行が全県巡視の際、中頭小学校を訪れ、勉学に励む生徒の姿を見て野村の教育は高く評価されました。しかし、その翌年、宜野湾小学校の設立に伴い、中頭小学校は廃校となりました。その後、教育制度がどんどん変わっていく中、1888（明治21）年に中頭高等小学校が現在の普天間高校敷地に設立され、1902（明治35）年に廃校、翌年その跡地に、宜野湾尋常小学校・普天間分校が設立されました。1906（明治39）年には普天間分校が独立し、普天間尋常小学校となり、現在の農協やグリーンベル商店街がある場所に設立されました。1923（大正12）年には普天間尋常高等学校と改称され、さらに1941（昭和16）年には普天間国民学校と改められました。



中頭高等小学校 1888（明治21）年



普天間には、農業の試験研究機関である農事試験場もありました。1902（明治35）年、中頭高等小学校の跡地（現在の普天間高校敷地）に中頭郡間切組合立農事試験場が設置されました。サトウキビや大豆、大麦などの農作物の栽培方法や肥料に関する試験などが行われ、農事講習会も催されていました。1907（明治40）年に浦添村に移転すると、その跡地に中頭郡間切組合立農学校が開校しました。その頃、敷地内に沖縄植物園を設立、また柑橘類やモクマオウの植栽も行いました。1916（大正5）年、農学校が嘉手納に移転した後も模範農場として利用し、農民の指導、サツマイモやサトウキビの畑地を作り、苗の配付などを行っていました。



農事試験場普天間試験地
1935（昭和10）年頃

沖縄県立農事試験場普天間試験地が設置されたのは、1923（大正12）年でした。農業の試験研究機関の中心として、主にイモと麦の原種の育成配付、特用作物に関する試験研究、特にサツマイモの品種改良を行っていました。その成果として、新品種の沖縄100号は全国的にも高く評価され、奨励品種として全国に普及しました。また、比謝川1号は3カ月で収穫できる早熟品種で、戦時中から戦後にかけての食糧難時代に庶民から重宝され「命を救ったイモ」として語りつがれています。



農事試験場の周辺には、中頭郡役所（後・中頭地方事務所）、中頭教育会館、中頭土木事務所、郵便局などの公共施設もあり、まちとしても中心的な機能を持っていました。



変わりゆく普天間

■ 「寺の前」の商店街 ■

前頁でみたとおり、明治期の普天間は中頭における近代教育機関の発祥の地であり、多数の公共官庁が置かれた「中心的なまち」でした。大正期に入ると普天間は中頭の交通の要所としてさらなる発展を遂げていきます。



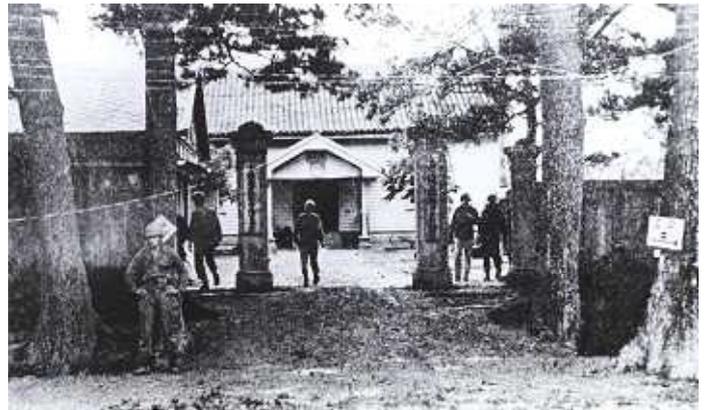
1922（大正 11）年、那覇～嘉手納間を結ぶ「^{ケービン}軽便鉄道」の嘉手納線が開通し、宜野湾村には北から大山、真志喜、大謝名の三駅が設置されました。そして嘉手納線の開通に合わせるかのように、普天間と大山駅とを往復する「乗合客馬車」も開通しました。この「乗合客馬車」は、普天間～大山間の片道を所要時間約 30 分で結ぶ、当時としては画期的な交通手段でした。大山駅の乗降者数が真志喜駅、大謝名駅のほぼ倍に相当する数値であること、他の二駅に乗り換え可能な公共交通手段が不在であったことを考慮すると、「乗合客馬車」が交通便利性に寄与し、普天間の交通アクセスも飛躍的に向上したといえそうです。

普天間の交通アクセスが向上したことと時を同じくして、普天間の都市化に拍車がかかりました。大正期から昭和初期にかけて、普天満宮・神宮寺前の通称「^{ティラスメー}寺の前」や並松街道沿いには医院、旅館、風呂屋、飲食店、理髪店、料亭、写真屋、時計店、雑貨店などのサービス業が立ち並びました。1937（昭和 12）年当時、普天間区の第一次産業に従事する戸数は区に占める割合の約 57%ときわめて低く、90%前後が第一次産業に従事していた当時の宜野湾村のなかでは突出して脱農村化していた傾向が見て取れます（「経済更正計画及其ノ実行費」）。1944（昭和 19）年に「寺の前」の商店街を中心とする「寺前大通り区」が単独の行政区として新設されたことは、普天間の都市化と関連するものと思われます。

■ 普天間の沖縄戦 ■

1942（昭和 17）年、総動員体制下のなか、中頭地方事務所が設置され、現地入隊などの兵事業務を掌握するようになりました。1944（昭和 19）年には普天間にも日本軍が駐屯し始め、日本軍は普天間国民学校や中頭教育会館などの公共施設はもちろん、民家にも分散して間借りしていたといわれています。地域では陣地構築などの徴用が日常化し、野菜、芋、豆などの食糧の供出にも追われるようになりました。

同年 10 月 10 日、10・10 空襲によって灰燼^{かいじん}に帰した県都那覇から、当時の県知事が普天満宮の洞穴に退



米陸軍第 96 師団司令部（中頭教育会館・現普天間高校）
1945（昭和 20）年

避してきました。中頭地方事務所に県庁の仮事務所が設置されたものの、県政は事実上停止し、那覇市政も不在であったなか、各地に四散した那覇市民に対する救済措置は放置されたままでした。普天間に通ずる並松街道では、那覇方面から退避してくる人々であふれかえり、「蟻の行列」さながらの光景だったといわれ、村役場や普天満宮では宜野湾村職員や村婦人会が退避してくる人々への炊き出しを行いました。普天間は空襲の直接的な戦災こそ被らなかつたものの、このような混乱に見舞われました。



1945（昭和 20）年 4 月 1 日、沖縄本島の読谷・北谷から上陸した米軍は、翌 2 日には普天間まで到達しました。沖縄戦における普天間区の犠牲者は 149 名にのぼると記録されています。このほか天然記念物にも指定された並松も一部を残してその大半が焼失、公共施設の多くも灰燼に帰し、焼け残った施設は米軍の司令部として接收されました。そして今日もお、字普天間の大半が基地に接收されたままとなっています。

オフリミッツの街

オフリミッツとは治安の維持や衛生上の理由から発令される、米軍人・軍属の「立入禁止令」です。そもそも米軍は自軍兵士の健康保持 - すなわち兵力の保持 - を一義的な目的とし、性病を含む感染症ないしは伝染病の防圧に力を注いでいました。そのため米軍に「不衛生」とであると判断された飲食店などは軒並みオフリミッツに指定されました。もちろん1956（昭和31）年の島ぐるみ闘争の頃のように、オフリミッツは基地経済への依存度の高い「基地の街」に対する経済的制裁措置として、ひいては民衆運動への分断策としてたびたび発動されたことも付け加えなければなりません。

■ オフリミッツと「米琉親善」

1953（昭和28）年3月末、突如として米軍は沖縄全域を対象としてオフリミッツを発令しました。このときのオフリミッツは「性病の予防」を理由としたもので、二カ月以上にもわたって沖縄各地の「基地の街」を直撃しました。この衝撃は一般のサービス業にまで波及し、那覇やコザの商店街では売上が通常の三分の一程度にまで減少し、「経営破綻」すらささやかれるほどでした。

もちろん普天間も例外ではありませんでした。経済的打撃を憂慮した宜野湾村はオフリミッツの解除を陳情し、「不健全な生業」を根絶する、「いかがわしい女」を地域から隔絶するという方策を立て、「社会の清潔」や「健康」という規範を目指すことになりました（1953年5月13日付「立入禁止解除についての陳情」）。

しかしこのような陳情自体が「54%の土地を軍に提供」、「村内及びその周辺にはたくさんの部隊がある」という基地の重圧のなかで語られていました。その重圧は「米琉親善」へと方向付けをし、戦後の普天間を「親善」のための「清遊の場所」たらしめることを余儀なくさせたと言えそうです。



1953年5月13日付「立入禁止解除についての陳情」
宜野湾市文化課所蔵

平成24年度 事業案内

今年度は、『ぎのわんの地名』の報告書が刊行されます。現在、その編集の真最中です。この『がちまやあ』が発刊される頃には、印刷所に校正原稿を送り、印刷を待つだけとなることでしょう。皆さまへお届けできる日が待ち遠しいです。

さて、次年度の宜野湾市史編集事業では、これまで調査してきた伊佐浜土地闘争がまとめの段階に入ります。市内民俗芸能調査事業では、市内の三月踊り（スンサーミー）の調査に入る予定です。市内各地へ調査に行きますので、その際はよろしくお願ひします。

また、『ぎのわんの地名』の発刊を記念しまして、博物館で地名をテーマとした企画展を秋頃に行う予定です。

最後に市民の皆さまへお願いしたいことがあります。宜野湾市の歴史・文化を伝える古い写真などがありましたら、ぜひご一報ください。市史編集等様々な事業の貴重な資料として活用させて頂きたいと思ひます。これからも、市史編集事業にご理解、ご協力をお願いいたします。

